

おわりに

この卒業論文を通して、私は日本の高齢化社会というもののさまざまな面を知ることができた。私は高齢者の生きがいづくりをテーマに卒業論文を作成することを選んだが、そのためには第一にそもそも高齢者とは、そして高齢化社会とは何なのか、ということを知ることが必要だと思った。そこで、第1章では、高齢化社会の現状を中心にみていくことにしたのであった。その中では、過去から現在までの日本の人口、高齢者人口の変動やその原因、特徴を調べていくことで日本の高齢化社会の主な外郭を知り得る事ができた。高齢化社会のおおまかな枠組みをみてきた中で、私はより地域ぐるみでの高齢化社会の現状を知りたいと思うようになり、第2章では故郷である東京都の江戸川区の高齢者生きがいづくりをみていくことにした。私の考える高齢者の老後の過ごし方では、主なものとして「趣味・娯楽」、「教育」、「就労」が考えられたので、それぞれを主として活動している江戸川区くすのきクラブ、社会福祉協議会、江戸川区熟年人材センターを実際に訪問していった。私はそこで働く人や活動をしている高齢者と直に触れ合うことで、自分の住む地域活動の現状を実際に肌で感じる事ができたのは私にとってとても大きなことであったといえるだろう。高齢化社会の外郭や故郷の地域活動をみてきた中で、私は、第3章において日本の高齢化社会に渦巻く問題や日本がこれから辿る道について言及していった。

こうした日本の高齢化社会をみてきた中で、私は何よりも高齢者が「活動する場」が今の日本社会には必要であると考えた。今日の日本社会では、介護保険を始めとする医療体制やホームヘルパー、養護老人ホーム等の多様な保健サービスが充実してきたが、それとは逆に元気な高齢者のための体制が不十分であるように思われる。現にマスコミや新聞等のメディアや本に取り上げられているのは、いつも寝たきりや痴呆の高齢者へのサービスばかりで、元気で健康な高齢者の老後の活動についてはあまり取り上げられていない。今の日本社会では寝たきりや痴呆の高齢者ばかりに重点が置かれ、元気で健康な高齢者への福祉サービスに対してはどうしても立ち遅れているように思われてならない。私が訪問した各種団体においても、毎年の財政が徐々に削減されていくことは、各種団体の活動の幅を狭め、しいては高齢者の生きがい活動の幅を狭めてしまうことに繋がっていくことになるのである。いくら高齢者に老後を楽しそうとする意欲があってもそれを活かせる「活動の場」がないのでは意味がない。高齢者が老後を有意義に過ごすためにも前述で述べたような趣味・娯楽や教育、就労を行える「活動の場」を今以上に設ける必要がある。「活動の場」が充実すれば、元気な高齢者もより積極的に生きがい活動に取り組むように思われる。現地調査をした際も高齢者の方々とお話をした中で、「活動をする場」が限られていること、より多くの「活動の場」の設置を求める声を聞いた。そういった高齢者のニーズも今の日本の高齢化社会には伝わっていないように思われる。この高齢者のニーズを受け取るためには日本社会自身の意識改革が最も必要である。よりわかりやすく言えば、今の日本の行政や企業、各種団体だけでなく、日本国民の一人一人が今、現在の高齢化社会に

目を向ける必要があるということである。今の日本社会は急速な高齢化を成した為の人々の高齢化社会に対する意識がまだ薄いように思われる。将来的に高齢者は今の2倍になると予測されている。この予測が何を示しているのか、私たちは考え、みつめなくてはならない。ただでさえ、高齢者の「活動の場」が不足しているというのにさらに高齢者が2倍になれば将来的には多く的高齢者が「活動する場」を失ってしまう。いつ、出かけても「活動する場」には同じ高齢者があふれていて、満身に活動することができなくなればそれは、高齢者の生きがいづくり活動への意欲喪失にも繋がることになるだろう。高齢者施設で働く方からも「地方紙やチラシ等で高齢者向けの活動を催せば、いつもそこには予想を上回る応募が殺到する。」と聞かされた。現状でこのようなことが生じているのであれば、将来的にはどうなるのか、おのずと予測はつく。こうした問題に日本社会が気づき、目を向けなければ、将来の日本の高齢者の生きがいづくりは困難なものとなる。そうならないためにも、今の段階で日本社会に生きる一人一人が今、置かれている立場を見つめ直し、高齢化社会に潜む問題を解決する必要がある。今、寝たきりや痴呆の高齢者に対する医療・保健サービスや年金と平行させて、「活動する場」を始めとする生きがいサービスを充実させていくことが将来、訪れる日本の超高齢化社会への打開策へと繋がっていくのである。

参考文献

- 浅野 仁『改訂版 老人福祉論』(川島書店 1998年2月20日)P.1 - P.6。
- 伊藤 真理子『たのしく学ぶ高齢者福祉』(ミネルヴァ書房 1996年2月10日)
P.204 P.209。
- 井村 圭壮『現代高齢者福祉入門』(中央法規出版 1998年5月1日)P.2 - P.11。
- 川村 匡由『新しい高齢者福祉』(ミネルヴァ書房 1996年10月15日)
P.13 - P.16。
- 河野 正輝『高齢者の法』(有斐閣 1997年12月20日)P.88 P.91。
- 佐野 豪『高齢者のためのレクリエーション』(1997年12月18日)P.8 P.17。
- 原田 正二『シルバー・コミュニティー論』(ミネルヴァ書房 1988年9月30日)
P.1 P.93。
- 松井 政明『高齢者教育論』(東信堂 1997年5月30日)P.15 P.18、
P.24 P.25。
- 平成14年度版 くすのきクラブ手引き
くすのきだより 2002年6月1日
江戸川区社会福祉協議会冊子
江戸川区熟年人材センターHP <http://www.sjc.ne.jp/edogawa/index.htm>
東京都福祉局HP <http://www.fukushi.metro.tokyo.jp/>
江戸川区役所HP <http://www.city.edogawa.tokyo.jp/>

あとがき

卒業論文作成に際しては本当に多くの方々から手助けをいただいた。社会福祉協議会職員の彦田氏や江戸川区役所職員的一条氏、江戸川区くすのき所長の森田氏を始め、私が実地調査として訪問した時には、お忙しい中、時間を割いて私のお話に付き合っただけたことは本当に感謝している。私は今回の卒業論文を作成する上で、何よりも大切にしたいのが実地調査であった。なぜなら、実地調査からは「今」の高齢者の姿をメディアや本等からではなく、直に自分の目で見て、感じとることができるからであった。実地調査をしていく中、そこには部屋や病院で療養している高齢者ではなく、笑顔で楽しそうに老後を過ごしている高齢者の生き生きとした姿を拝見することができた。そこで、私は高齢者にとって生きがいがあることがどれだけ大切なのか、改めて知ることができた。

今回の卒業論文作成において、私事でゼミに参加できない中、理解をしてくれて、いつでも私を迎えてくれたゼミ生や中村祐司先生には感謝してもし尽くせないものがある。私は今後、社会福祉士になるためより一層の勉学を励むことになるが、中村祐司先生には卒業論文だけでなく、私の将来や進学に関しても親身になって相談にもものっていただき、このことに関して本当に感謝しており、このゼミや卒業論文を通して学んだことは私の将来にとって大きな糧になることはいうまでもないだろう。